

話は遡り、昔々のそのまた昔のまた昔。

いざなぎのみこと　いざなみのみこと

伊邪那岐命と伊邪那美命の二柱の神は漂う国土を固定する役目を授かった。その為に与えられた矛で下界をかきまわし、オノゴロ島と呼ばれる島が出来上がる。島に降り立った二柱は、そこにパツと宮殿を建てた。

イザナギは出来立ての立派な柱を見上ると、その視線をイザナミに移す。そうして、ふと氣になった。

「イザナミ、お前の体はどのようにして出来ているのか」

そう問われたイザナミは、はにかみながら答える。

「そうですね。私の体には、成長しても足りないところがあるのです」

「そうなのか。実は、私には成長しきり余つてるところがあるんだ」

彼女の体を知り、己の頃も打ち明けた。それからイザナギは考え、思いつく。

「なるほど……。ならば、お前の足りないところに私の余ったところを入れ、国を生もう。どうだろうか？」

「それはいい考えですね」

彼の意見に賛同し、イザナミは美しく微笑む。「ならば、この柱を回り、巡り合った所で結婚をしよう。私は左から、お前は右からだ」

二柱は互いに柱をぐるりと回り、巡り合った

所で言葉を口にする。

「まあ、なんて素敵な殿方なのでしょう……！」

「ああ、なんて愛おしい乙女よ」

そうして彼等は結婚し、子を産んだ。しかし、

その時に産まれた子は水蛭子であった。お互いにきつと次は大丈夫だと言いつ聞かせたが、それも同じく不吉な子であった。

天つ神に相談してみれば、それは女から先に誘った事による不吉であるとの事だった。その事を受け、今度はイザナギから声を掛け、再び子を残した。そうして出来た子どもは、問題なく健康な国だ。

国を産み、その次は神を産む。数多くの子を残し、そうして火の神を産んだ。その時、イザナミ

の体は炎に焼かれ、病に倒れてしまう。

その後も息も絶え絶えになりながらいくつかの神を残すが、炎に蝕まれた彼女は、結果として命を落としてしまった。

目の前には、美しい顔のまま冷たくなっているイザナミがいる。揺さぶれど声をかけれど、彼女が目を開くことはなかった。

「イザナミよ、何故……。私達は、これだからどう……？　なあ、イザナミ……っ」

無意味な呼びかけは涙となり、溢れていく。そうして、気が付けば火の神を殺していた。そうして飛び散った血と死体から、いくつかの神が産まれたが、妻を亡くし傷心した彼にはどうでもいい事だった。

彼女は死んでしまった。それは紛れもない事実である。しかし、イザナギは吹っ切れる事が出来ずに、どうしても彼女に会いたくて、彼女のいる黄泉の国へ後を追った。

黄泉の国、戸の向こうにいるはずのイザナミに向かって語り掛けた。

「イザナミ！ 私だ、イザナギだ。お願いだ、私はまだ、お前とすべき事がある。まだ終わっていないんだ。だから、一緒に帰ろう。戻って来てくれ……」

切なる思いを口にして、戸に縋らせた手を握る。

戸の向こうで、イザナミは言う。

「ああ、イザナギ……。残念です。もう少し早く

来てくだされば、今直ぐにでもこの戸を開けられましたのに。私は、既にこの国で食事をしてしまいましたの……」

沈んだ声でそう告げられ、イザナギは目を見開く。もう、駄目なのかと。微かな光が失われた気分だった。

しかし、戸の向こうで彼女は続ける。

「ですが、愛しの貴方が迎えに来てくれたのです。私も、貴方と共に帰りたい。ですから、黄泉神に戻るよう交渉してみます」

「ですが、その間ここを、決して覗かないでくださいね。私は、貴方を信じます」

そう言い残し、彼女は中に帰って行った。

まだ、希望はあった。少し待てば、再び愛しの

妻と共に……。

しかし、その時間はとても長かった。望んだ再会を前に、せつかちになつていたのかもしれない。イザナギはその間に耐え兼ね、ついにその戸を覗いてしまった。

そこには生前の姿からは想像もできない程の、酷い有様の彼女がいた。イザナギは思わずその恐ろしさにたじろぎ、逃げてしまう。

それを見たイザナミは、細い喉からおどろおどろしい声を引き出す。

「ああ、何という事……私に、恥をかかせましたね……」

恐ろしい形相で追いかけてくる彼女から必死に逃げる。そうして外に出た時、イザナギは出口

を大きな岩で塞いでしまった。

その岩に手を触れると、向こうから愛しの彼女の声がする。

「ああ、愛しのイザナギよ。何故、こんな酷い仕打ちを……！ 貴方がその気ならば、私は貴方の国の民を一日千人殺しましょう」

「……愛するイザナミよ。それならば、私は一日に千五百の命を残そう」

気が付けば涙が流れていた。

後ろ髪を引かれながらも、ゆっくりとその脚は進められる。閉じられた岩の向こうで、乙女のすすり泣きが小さく響いていた。

黄泉の国から帰ったイザナギは、穢れた自身

の体を洗う事にした。

「随分と、汚れてしまったな……」

そう呟き、川で体を清める。襖の最中に次々と生まれる神々、そしてその最後に、左目から天照大御神神、右目から月読命、次に鼻を洗い須佐之男命が生まれる。

産まれた三柱を目にすると、イザナギはとも喜んだ。それからは、なんとも貴い力を感じたのだ。

「おお……。これは、凄い。今までの中で、最高の子達だ」

そうして彼は三柱の子にそれぞれ役目を与えた。

まず、アマテラスに高天原を任せ、自身の首飾

りを託す。次にツクヨミに夜の食国を任せ、そして最後にスサノオに海原を任せた。

しかし、それから暫くして、大変な事が起こった。スサノオが仕事をせずに、海や山が荒れ果ててしまっているのだ。その報告を受けたイザナギは、そこに駆けていき、状況確かめた。

その参事の中心に、酷く泣き喚くスサノオがいた。

「何をしている？　ここを収めるのはお前の仕事だろう、何故泣いているのだ」

問えば、彼は泣きながら答える。

「父上、俺は母上にお会いしたいのです！　だから、母上のいる場所に行きたいのです！」

強く言い渡されたその言葉に、イザナギは一

瞬だけ息を呑んだ。

それであれば、自分だって――。その言葉を呑み込み、彼は言う。

「何を……何を言うかお前は！ であれば、もうここにいるな！」

一喝すると、イザナギは直ぐにその場から去る。つまりは、追放と言う事だ。

スサノオは涙をぬぐって立ち上がり、考える。

「こうなったら、姉上にこの事を報告してから母上のところに行こう」

そう決めて、姉のいる高天原に向かった。

そうして会いに行った方がいいが、突然やって来た弟にアマテラスは疑心を抱いていた。もしや、この国を乗っ取るうとしているのではない

かと。

万が一のために武装をし、彼女は問いかける。
「して、スサノオ。主は父上に追放されたと聞いた、一体何のためにここに来たのじゃ。まさか、乗っ取りに来たのではあるまいな」

「誤解です姉上！ 俺は、母上の所に行く前に、姉上にご挨拶をと思って」

なんとか誤解を解こうと事の経緯を説明すると、アマテラスも少しは納得いったようだったが、その真偽は疑っているようだ。

彼女は少し考え、こう言った。

「では、主はその潔白を証明できるか？」

「でしたら、誓約を立てましょう！ 互いの物を交換し、子を成しましょう。そうすれば分かる

「はずです、俺が潔白である事が」

そうして潔白を証明するため、それは行われた。スサノオの剣と、アマテラスの首飾りを元の子を成す。

剣からは三柱の女神が、首飾りからは五柱の男神が産まれた。その結果を見て、スサノオは大きな声を上げる。

「どうですか姉上！ 俺が潔白であつたからこそ、この女神は産まれました。つまりは俺の勝ちという事です！ そうですよね！？ ね！？」

「あ、ああ。そうじゃな」

あまりにもの食いつき用に若干引いていたが、間違つた事を言っている訳ではないだろうと同意をしたのだ。しかし、それが間違いだつたのか

もしれない。そこでスサノオは調子にでも乗つたようだ。

勝つた事で気分がよくなつた挙句に、簡潔に言えば色々とやらかした。後ろから飛び出して脅かして来るだけのような、悪戯という可愛らしい言葉で済めば良かったのだが。

「アマテラス様！ またスサノオ様が……」

「きつと、考えがあつての事じやろう。神殿を汚したのも酒に酔つての事じやろうし、田の畔を埋めたのも土地を惜しんでの事。だからそう怒つてやるな」

「多少のヤンチャは、赦してやってくれ」

アマテラスは何度もその所業を見逃し、目を瞑っていた。だが、事は次第に悪化していく。

ある日の事、彼女が機織屋で神衣を織っていた時の事だ。突如天井に穴が開き、牛の死体が投げ込まれる。

それにより、その場にいた者が死んでしまった。

スサノオは悪戯成功だと言わんばかりに、るるんと中を覗く。そして死人を出した事に気が付くと目を見開き、流石に不味いと思ったのかそそくさと逃げていった。

事の事態に気が付き、アマテラスは蒼白になりながら「すまぬ」と一声漏らすと、機織屋から去って行く。

「あつ、アマテラス様！」

他の制止の声も聞き届けず、彼女は何処かに

行ってしまう。

そうして傷心したアマテラスは、岩屋の中に引き籠ってしまった。閉ざされた岩戸の向こうに姿を消すと、たちまち世界は暗闇に染まる。

それから数日が経ち、このままでは世界が滅びてしまうという所まで来てしまった。

「ああ、どうしましょう。アマテラス様が閉じこもってしまった、このままでは世界が……」

一刻も早く現状をどうにかせねばと、神々は

集まって話し合う。その時、思おもいかねのかみ金神がひら

めいた。

「儂にいい考えがある。皆の者、耳を貸してくれ」
「こによこによると自身の考えを告げると、皆は

「それがいい」と彼の考えに賛同する。かくして、神々による名付けて「アマテラス様に出てきてもらおう大作戦」が決行される事となったのだ。各自手早く準備を済ませると、早速彼等は岩屋の前に立ち、作戦開始とした。

ついに作戦決行の時、そうして神々は岩屋の前で最大な宴を催した。

あめのこやねのみこと

天児屋命が祝詞を奏上した後に、

あめのうずめのみこと

天宇受売命が豪快に舞う。その踊りに神々はどっと笑いだし、飲めや歌えやと辺りはとても賑わった。

勿論、その声は岩屋の中まで届いていた。何せ、

本当に直ぐ前でそれは行われていたのだから。そして、アマテラスはその声がどうしても気になっていた。

自分がここにいるせいで、必然的に世界は暗闇に閉ざされているはずだ。だと言うのに、何故彼等はあるなにも楽しそうなのだろうか。

「祭り、か……？ 我はここにいると言うのに、何故に……」

アマテラスは岩戸をそつと開け、そこを覗く。

「お主ら。我が居ないと言うのに、一体何故楽しそうなのじゃ……？」

問うと、踊りながらアメノウズメが答える。

「ふっふっふ。それはですね！ なんと、貴女様よりも貴いお方がお見えになられたのです！

それで皆で喜び、こうして舞い遊んでいるのですよ！」

そう答えている間にも、アメノコヤネと

ふとだまのみこと

布刀玉命が鏡を差し出す。

鏡に映っているのは勿論自分だ。少なくとも、

この目にはそのように見えた。その事で更に不思議に思ったアマテラスがもう少しだけと身を乗り出すと、それを見逃さずに待ち構えていた

あめのたちからおのみこと

天手力男神がその腕を掴み引き出す。

アマテラスの体が完全に岩屋の外に出た所で、

フトダマがしめ縄で岩戸を閉じる。

「どうですか？　これでは戻れませんよ、

アマテラス様」

その時、暗闇に満ちていた世界に再び太陽が訪れ、明るく暖かな陽が差す。

こうして、大作戦は無事に完了し、神々は話し合いの末にスサノオを追放したのだ。

その数日後、すっかり立ち直ったアマテラスは弟のツクヨミの方に頼みごとをした。

「姉上、私に頼みとはなんでしょう？」

丁寧に尋ねてくる彼に、アマテラスは要件を伝える。

うけもちのかみ

「ああ、それがの。保食神、つまりウケモチの所に行つて欲しいのじゃ。どうやら、主に手料

理を食べてほしいようでの。頼めるかの？」

「仰せの通りに」

ツクヨミは素直に頷き、姉からの頼み事をする為にウケモチの所へ向かつて行く。

その様子を横で見ていたコヤネは、ふふっと笑いながら申し上げる。

「ツクヨミ様は、スサノオ様と違って利口なのですね」

「言つてやるでない。あれじゃ、スサノオはちと調子に乗り過ぎたのじゃよ」

相変わらず弟に甘い方だと笑ったが、その後にふと思う。

「アマテラス様。それ、あまり庇えていないですね」

「そうか？」

この笑みは、わざとだったのだろう。

そうしてその頃、ツクヨミはアマテラスの言いつけ通りにウケモチの所に行つていた。

「ツクヨミ様、いらつしやいませ。少々お待ちくださいね、今お食事をお作りしますのです」

笑顔で迎え入れたウケモチは、頭を下げると早く料理を食べてもらいたいのか、いそいそと台所まで行つてしまう。どうやら、彼女が料理を振る舞ってくれるそうだ。

女神に料理を作ってもらうなんて事、初めてだ。内心ワクワクしながら、案内された所に腰を下ろして待つていた。

少しして、豪華な料理が出る。ツクヨミはあ

りがたくそれを受け取り、いただきますの後に一口食べると、ウケモチは緊張した面持ちで尋ねて来た。

「ど、どうでしょうか……？」

「ああ、とても美味しい」

正直な感想を言うと、彼女はとても嬉しそうに笑みを浮かべる。

「お口にあったのならなによりです！ では、私は食後の甘味を仕上げますので、ごゆっくりどうぞ」

そう言って台所に引っ込んだウケモチ。食後の甘味まで用意してくれるとは、なんとも嬉しいおもてなしだ。

しかし、姉では無く自分にもてなしてくれる

とは。もしかして、あの女神は自分の気があるのだろうか、そうだとしたら悪くない気分だ。いやいや、自惚れるのは止しておこう。ただの味見役かもしれないだろう？ だけど、期待してしまうではないか。

そんな事を考えながら、黙々と食事を行うツクヨミ。そこで、ふと思ってしまった。

こんなに美味しい料理、どうやって作っているのだろうか。それならば是非、料理をしている所を見たい。

好奇心が勝ち、口にしていた物を飲み込むと台所を覗きに行く。

「なっ……」

そこではウケモチが、なんと口から食材を出

し、それを料理していたのだ。

「あら、いかがなさいましたか、ツクヨミ様？」

彼女は平然とした様子で首を傾げ、もう一つの食材を吐き出す。それを目にして、ツクヨミは状況を察した。

つまりこの神は食物を口から出す事が出来て、出した食材で調理したものを振舞っていたのだ。それに気付いた途端、頭に出て来た言葉は一つ。

「汚らわしいっ！」

ハッと冷静になった時は既に遅く、彼女は死んでいた。手にある刀と、そこに付着した血を見れば、誰がやったかは一目瞭然。

「ああ、やらかした……やらかしたあ……！」

一応、その事をアマテラスに報告すると、案の

定彼女は怒った。

「なっ……なんて事をしてくれたのだツクヨミ！ ああもう、お前は利口な奴だと思っていたのにつ、悪い奴め！ もう二度と私の前に顔を出すでない！」

そう言われると、ツクヨミの頭の中も真っ白になる。そして、言葉が心を追い越し口から出た。「だ、だったら私だって二度と姉上と関わりませんっ！」

そう言い切ると、彼はすぐさまその場から姿を消す。

そんな様子を、そこで見ていたコヤネは苦笑いしながら見ていた。この姉弟、結構似ているなあと。どういう所がかと言えば、感情の高ぶり

で大きな事をやらかす所が。

「まあまあアマテラス様、落ち着いて」

「これが落ち着いていられるか！ あ奴の料理は美味であつたのにっ！ もう知らぬわ！」

食べ物の恨みは恐ろしいと言つた所か。これは、宥めるのに少し時間がかかりそうだ。コヤネは長期戦を覚悟して、またオモイカネに相談しよつかななんて考えた。

○

それから少しして、アマテラスの所に物が届く。

「これがその、草薙の太刀か」

「はい、アマテラス様。八岐大蛇から見つかったのだそうで、スサノオ様からの献上品でございます」

刀は太陽の光を反射し、その輝きを見せる。これは、なんとも素晴らしい一品だろうか。

「そうか、スサノオが……」

アマテラスはそう言つて微笑みを漏らした。その後、目を伏せふつつふと笑う。

「お主ら、我は決めた。決めたぞお……」

「可愛い弟の遠まわしな謝罪に免じて、我は『仲直り』をしにいく！ そう言う訳だ、酒を準備しろ！」

これが漫画であれば、ドンツという効果音と集中線が入っていたであらう。

名づけて、「お姉ちゃんだから許してやろう！

酒のみや大抵どうにかなるノ巻」だ。

そう、世の中酒のみやどうにかなるのが真理なのだ。少なからず、彼女にとっては。

という訳で、アマテラスは酒を持ってスサノオがいると言う場所に向かった。

「随分立派な宮殿を建てたものじゃのお」

あのヤンチャ者も、人を助け妻を迎えた事で大人になったようだ。

くしなだひめのみこと

事前に妻の櫛名田比売命に連絡は取っている。彼女は快く受け入れてくれ、ついでに義姉様とも呼んでくれた。なんともいい義妹を持ったものだ。

先で待っていたクシナダと、スサノオがいる部屋まで案内してくれた。

クシナダがその戸を軽く叩き、声を掛ける。

「スサノオ様に美味しいお酒をご用意しましたの。どうでしょうか？」

言うと、向こうから「本当か！」と弾んだ声が聞こえる。そうすると二人は顔を合わせて微笑み、アマテラスの道を空ける。

「そのお酒って、何のやつだ？」

ワクワクとしてその戸を開けたスサノオは、妻と娘と、あと二人いる事に気が付き、一瞬だけ固まる。

「よおスサノオ。酒、持ってきたぞ」

にと笑うアマテラスと、予想打していない

かつた出来事に混乱するスサノオ。

「あ、あね、あねうえ？ 何故、ここに」

「アマテラス様から直に来てくださったのですよ。失礼のないように、ですよ」

「ごゆっくりどうぞ。わたくし共は別室にて控えておりますので、何かあれば」

完全に混乱しているスサノオを置いて、彼女は微笑みながらその場を後にする。

「え、えつと……」

どうやら、あの時の自分の暴挙を今度はアマテラス本人が咎めに來たと思っっているようだ。向かい合つて正座した状態で、彼は目を泳がせている。

「何、今度は我が直に咎めに來たとかそういう

のではない。ただの、我は主と酒を飲みに來た」
クシナダが用意した盃にとくとくと酒を注ぎ、それを渡す。

「ほれ、遠慮せずグイつと行くがいい、グイつと」
「じゃ、じゃあ、頂きます」

少々飲みづらいが、酒の魅力には負ける。一杯飲んでしまえば、あとはもう酔うだけだ。

とは言え、スサノオもアマテラスも酒には強い体質だ。酔つても丁度氣持ちよい程だった。

「姉上。刀は届きましたか？」

「ああ。立派な太刀じゃのお、あれは八岐大蛇から出て來たのじゃろ？」

「はい。尾の所に」

「痛くなかつたのかの……」

「それは、どうなのでしょうかね……」

酒を飲んで会話は難なく進むようになる。

作戦の第一段階は完了だ。また次、どちらかと言えばこちらの方が手強い気がする。明日、お姉ちゃんだから（以下略）、第二段階の決行だ。

スサノオの件はともかく、ツクヨミをあそこまで怒鳴ってしまったのは完全なる失敗だ。実際、何も知らずに口から出された食物で調理したものを食べたとなれば、汚いと思うのは当然の事だ。確かに自分も初見では驚いた。

それでも殺すのはどうかと思うが、これに関しては前もって言っておかなかったこちらの不備でもある。

だからまた酒を用意した。結局、同じ父の同じ

顔から産まれた姉弟だ。なんやかんやで通ずるところはあるだろう。実際、ツクヨミとスサノオは顔が似ている。垂れ目な所とか。それは自分もなわけだが。

しかし、一個厄介な所があった。彼がどんな様子かを見に行かせたところ、どうやらツクヨミはあれ以来家から出て来ないそうだ。仕事はしているようだが、一切外に顔を出さないとの事。その報告にため息を付くと、オモイカネが言った。

「姉弟ですじやの。何がとは言いませぬが」

「それはもう、言っているのと同じじや」

さて、どうしたモノか。普通に呼びかけても出て来ないだろう、スサノオのように酒で釣れる

かどうか。予想だが、他の神に酒を餌に呼んでもらうても、奴は自分の姿を目にした瞬間に戸を閉め出て来ないだろう。そんな感じがする。

しかし、ここに引き籠りの先駆者がいる。引き籠り及び神の仕事放棄はそう長くは持たない。何故なら、釣られた途端に問答無用で引きずり出されるから。

「引き籠りは長くは持たんと言う事、先駆者として教えてやろうかの」

「それがよろしいでしょう」

オモイカネの同意を得た所で、アマテラスは通りかかったそこらの神に酒を持たせる、さて自分はバレないように侵入しようか。

夜の食国に入ると、ツクヨミが住んでいる家

の前にその神を用意する。そして自分は最大限まで気配を消し、戸の横で待機した。

「あの、ツクヨミ様」

その神が声を掛けると、五秒ほどの間が空いた後にその戸の向こうに気配がやって来た。

「何の用？」

「その、ツクヨミ様最近お疲れだと聞いたので、お酒を持って来たのですが……」

予め用意していた台詞を言ってもらうと、向こうでツクヨミは考えているよう。また数秒の間が空いた後に、戸が少しだけ開かれる。

「ちなみに、銘柄は……？」

その瞬間、アマテラスがバツと手を伸ばし、過去に自分がされたように弟を引きずり出す。完

全に油断していた彼は、簡単に中から出すことができた。

「ふう、気配を消すのもそこそこ疲れるのお」

自分が神々にかけて苦勞を身をもつて実感している、ツクヨミは驚いたように静かに目を見開く。

「何故、ここに……」

そりやこの反応にもなるだろう。口だけでとは言え絶好した姉がいるのだから。

酒を渡してもらうと、お使いを頼んだ神は空気を讀んで即座に退散する。それを見送ってから、持って来た酒を見せた。

「言ったら、酒じゃよ酒」

「あ、ありがとうございます。では、私は」

受け取るや否やそそくさと家に帰ろうとする彼をもう一度引つ張る。

「何を言う、我も一緒に飲むに決まっているであらう」

「えつ、ですけど、その……」

言われずとも分かった、関わらないと言い合つたばかりではないかと、そう言いたいのだろう。

「顔も合わせぬと？ 一時の感情的な発言を鵜呑みにするでない、馬鹿真面目か」

「そういう訳だ。飲むぞ、ツクヨミ」

腕は掴んだまま酒を揺らし、にかつと笑う。

「わ、分かりました。じゃあ、どうぞ」

ツクヨミはこれから出来る抵抗がないと言う

事を察すると、微笑を浮かべそれに応えた。

そうして飲んでみて分かったが、どうやらこちらの弟は酒に弱いようだ。昨日スサノオと飲んだ物と同じだと言うのに、一杯目でもう机に臥して、ふにやふにやとした声で面白い程に内心を吐き出す。

「僕だって……僕だって前もって知っていれば手は出さなかつたはずなんですつ。だけど、びつくりしちゃつたからあ……!」

机を優しく叩きながらそう嘆く。

オモイカネが姉弟ですれと言つた意味がよく分かる。これは確かに、遺伝子だ。同じ顔から生れただけある。

「それに関しては我が悪かつた。ほれ、もう怒つ

てないから、大丈夫じゃぞ。まあよくある事じゃろ、我も大人気なかつたの」

宥めるように撫でながら言つと、ツクヨミはお酒で赤らんだ顔を上げて問う。

「もう怒つてないのですか？ 僕、姉上の事姉上つて呼んでもいいのですか？」

「断る理由はないからの」

「うう、姉上え……」

泣きながら抱き着いてくる弟をよしよしと看ると、ついに酔いが回つて眠つてしまふ。それを寝かせながら、アマテラスは考える。これ、記憶残る系統だつたらちよつと不味いかもなと。いや、それはそれで面白そうだし、いっか。

そして、一時間ほどして彼は起き上がった。

勢いよく上半身を起こすと、部屋で悠々と茶を飲んでいる姉を確認する。

「さっ……、先ほどの事は即座に忘れてくださ
いっ！」

「うむ、忘れられたらの」

顔を赤くして叫んだツクヨミに、ふふつと笑
いながらそう返す。

大作戦は無事成功した。アマテラスはとても
清々しく思いながら、羞恥に悶えている弟を横
目に茶を飲んだ。

○

雄大な海に浮かぶ一つの島国、これは亜細亜

に属する国の一つだ。

黄色人種と呼ばれるが実際はそこまで黄色
くもない肌色で、瞳や髪は黒か茶の二択、そんな
人間が住んでいる。そして、そこには人の目には
見えない者達もいた。

これは、そんな八百万の神々が生きる国、日本
の終わりの話。そして同時に、一匹の竜の始まり
の一幕だ。

時は令和と呼ばれ、人々は今日も学校やら会
社やら忙しく生きている。

そんな今の世の中、神に手を合わせる者こそ
いるも何やかんやで人だけでどうにかなってい
る。余程の事がなければ手出しは無用と言うの

が暗黙の了解だ。

鏡を覗けば国で生きている民の様子を見ると出来るが、これが面白いと言われるとそうでもないのだ。何せ人の一生は基本的にいつの時代も変わらない、大多数が既存のテンプレートに沿ったつまらない話なのだ。

今日は何をしようか。織物でもするか、それとも夕飯の献立でも考えるか。たまには人の世に遊びに行ってもいいかもしれない。ここ数年で人の世は大分変わった。

大抵は、そんな事を考えているうちに一日が終わっているのだが。

さて、そんな事を考えている彼女だが。彼女は太陽の神であり日本の最高神である女神、天照

大御神その者だ。

アマテラスは、考えていた。そろそろ秋刀魚が美味しい時期だろうか、と。

ああそうだ、今日の夕飯は秋刀魚の塩焼きにしよう。そう考え早速材料の調達をしようと立ち上がった時。

「ん。なんじゃ、この気配……」

何処からだろうか、神々の持つ神力と似ているが違ふ何かの力を持った者が、こちらに向かつてきている。

縁側から庭に出て、気配のする空を見る。まだよく見えないが、そこには黒い何かの存在が確認できた。

「あれは……?」

目を細めて見てみると、近づいてくるその形状がはつきりとしてくる。そしてそれは、アマテラスのいる家の庭に着地した。

大きな黒蜥蜴が翼を持ったようなそれは、所謂竜なのであろう。それは広げていた翼をたたみ、口を開く。

『余は、神になりたい』

単刀直入に言い出した黒竜は、大きな赤い瞳をアマテラスに向ける。その目は真剣で、何も冷やかしや冗談ではない事は伝わった。

「神にか?」

『ああ。天照大御神、この世界の太陽よ。余の師となってくれぬか?』

訊き返すと、竜はこくりと頷きそう申し出て

くる。

こんなことは初めてだが、弟子を取って指南してみるのも悪くはないだろう。有り余った時間を退屈して持て余すより、未来ある若者の支援をした方が余程有意義だ。

しかし、その前に一つ、問わなければならない事があった。

「我は構わぬ。しかし……」

「我でいいのか? この国だけにあらず、世界には様々な神がいるのじゃ。師を誰とするかはよく考えたほうがいいからの」

竜の赤い瞳を見据え、問いかける。

師匠という存在はそう安々と決めていいものではない。八百万というだけあり、この国だけに

でも沢山の神がいる。加えて、少し海を出ればそこには他所の国があり、不服ながらそこにもまた他の神がいるのだ。

その問いに、竜は迷いなく答えた。

『お前がいい。余は、太陽の名を持つこの世界の主であるお前に教わりたい』

その言葉に嘘はない。であれば、その心に応えなければならぬだろう。

「そうか。分かった」

こくりと頷き、アマテラスは笑みを浮かべる。

「では、お主は今日から私の弟子じゃ！　して、名は何という？」

弟子の名を知らぬ師などいないだろう。早速名を尋ねると、彼は小さく笑って答えてくれた。

『アンリユウだ』

「あんりゅうか、良い名だな。ちなみに、漢字ではどのように書くのじゃ？」

名前を知ったらなんと漢字で書くのかも気になるモノで。いつもの癖でそのまま尋ねたが、彼女には一つ失念している所があった。

そもそもだ、この竜は何処からやってきているかが不明だ。そこに漢字が存在するかどうかは危うく、しかもこの神力に近いがそうとは言えない不思議な力、この世界の者ではなさそう。

訊いてから気が付き、彼を見る。そして案の定、アンリユウは首を傾げた。

『かんじ……？　それは、この世界の文字の事

なのだろうか』

「この世界のと言うか、この国と言うかこの辺りの国と言うか。まあ、文字の一つじやな。例に、我の名を漢字で書くと……こうなる」

空气中に文字を書くように指を動かすと、書かれた文字が可視化され、宙に天照大御神の文字が浮かび上がる。

天を照らす大神という文字配列は、その漢字の意味も分らないであろう彼の男心をくすぐった。

『なんか強そうだ、やっぱり太陽の女神なだけあるのだな！』

「そうじやろうそうじやろう、なんて言ったってこの我の名であるからな」

目を輝かせたアンリユウに更に気分を良くしたアマテラス。そして、彼女は一つ素晴らしい提案をした。

「では、主の名を示す文字も考えてやろう！」「いのか？」

「ああ。待っておれ、考えるのだな」

師匠が弟子に名を授けるアレ、一回やってみたかったのだ。一から名を考えるとなると大変だから、読みが既に決まっているのは丁度良い。

さて、どのような何しうか。アンリユウと言う発音であるのなら、思いつくのは一つだった。宙に書いた文字を浮かび上げさせ、彼に見せる。そこに書いてあるのは「暗竜」という二文字だ。

『これで余の名前になるのか……！ 凄いな』

「そうじゃぞ。上の一文字がアンと読み、下の文字がリュウと読むのじゃよ。どうじゃ？」

『ああ、気に入った！』

喜んでくれて何より。何だか幼い子どもを見ているかのように、なんだか胸が暖かくなった。

漢字の前に、ひらがなとカタカナを覚えさせるべきだろう。暗竜の母国に文字があるとすると、その二つと同じ形式だろうし、こちらは覚えやすいだろうと踏んだ。

しかし、その前に親睦を深めるべきだ。

「ほれ、中に入れ。お腹すいていたりするか？ 菓子ならあるし、なんなら作ってやるからの。遠慮なく言ってくれ」

勿論、竜の足に靴が履かれている訳もない。アマトラスは安心して中に入れた。

『そうか。では、お前のお勧めのご飯を食べたい。余はよく分からないから』

「うむ、ではお勧めの菓子をやろうかの。竜の口に合うかは分からぬが」

そうして、戸棚にしまっているお菓子を丸い竹ざるにいくつか入れ、出してやった。ついでに一個だけ残っていたお土産の最中も食べさせてやろう。

暗竜は見た事ない物を目にとると、興味深そうにそれを眺める。

「何も考えずに出したが、竜の体には毒になる物とかあったりするのか？」

『問題ない。多少毒になるくらいであれば、体内の魔力が勝手に浄化してくれる』

そう言つて、暗竜は袋に入つた豆菓子を袋ごと口にしようとした為、アマテラスは慌ててそれを止めた。

「袋は、食べ物ではない。毒以前の問題として、口に含む物ではないのじゃ」

こういう袋は何と言うのだっけか、確か、びにーるとか言つたか。詳しくは知らないが、これが食べられる物ではない事は流石に分かる。そもそも、咀嚼も出来ないだろう。竜は出来るのかもしれないが。

暗竜は顔を引っ込め、自分の起こした行動を恥じるように目をそらす。

『そ、そうだったのか。すまない、食事が梱包されている事なんて無かつたものだから、つい』

「まあよい。分からなかつたり出来なかつたりしたら必ず我に言うのじゃぞ」

袋を開けてやり、豆をいくつか手に出して彼の口元に持つていく。

『ありがとう』

暗竜は手から直接食べようとしたが、その直前で止まり、顔を引いてしまう。懷いてきていた猫に急に威嚇されたような気持になつて少しシヨックだったが、冷静に返す。

「ああ、手からだと嫌だったか？」

そう言つと、暗竜はおどおどしながら言つた。『そうではない。その、手を傷つけてしまうので

はないかと思って……』

暗竜の口の中に見える牙は竜とだけありとて
も鋭く、獲物を狩る肉食獣の牙に近いのだろう。
確かに、万が一にでもこれが刺さったら痛いな
って騒ぎではないだろう。

「仮に怪我をしたとしても大丈夫じゃよ。神の
体は丈夫に出来ておる、それに、多少の怪我なら
神力で治るので」

試しに台所から包丁を持って、手の甲を軽く
切る。皮膚の正面だけではあるが、確かに血が出
た。しかしその傷は一瞬にして治り、元通りにな
った。

『だ、だとしても突然自分の手を切らないでく
れ。ビックリしたぞ』

「すまぬすまぬ」

包丁と一緒に持って来た皿に菓子を入れ、床
より机の方が楽に食べられるだろうと思い、ち
やぶ台の上に置いてやる。

暗竜は少し体の大きさを変え、ぼりぼりとそ
れを食べる。

『美味しい』

嬉しそうにそう言って、あつという間に全て
を平らげてしまった。

「それは良かった。というかお主、大きさを換え
る事も出来るのだな」

『ああ。体内の魔力量を調整すれば、ある程度の
大きさまでは小さくもなれるし、大きくもなれ
るのだ』

心なしか、褒められて誇らしげに教えてくれた。

今の暗竜は、大型犬より大きいくらいの大きさだろうか。そして彼はアマテラスより少し大きいくらいの大きさに姿を変える。

横に座ると、なんだか自分の使いみたいだ。使役と言えばアマテラスには八咫鳥という三本足の大きな鳥がいるが、これは大きいといえど普通じゃ見かけない程だ。それはそれで使役している感が出るが、強そうなのは竜の方だろう。「うむ、このくらいが丁度良いな。なんだか、竜を使役しているようだな。強くなった気分だ」

『お前が望むのなら使役されても良いぞ』

「そうか、それは嬉しいのお。だけど、お主は我

の弟子じゃ」

『ああ』

暗竜はそう答えると微笑んだ。

そして彼は畳の上で丸くなる。疲れているのだろうか、その体勢はまるで猫のようで、何とはなしにその頭を撫でると、彼は気持ちよさそうに目を細める。

心の内の何かがくすぐられた。これが母性本能か姉心か、どちらかは分からないが。

これから楽しくなりそうだ。アマテラスはそう思い、程なくして眠りに着いた竜を見守っていた。

その日の夕飯は、刺身にした。弟子が出来た記

念として、ちよつとしたご馳走だ。

いつものように盛り付けたご飯を用意し、机の上に出す。

「さて、食べようか。暗竜、ご飯を食べる前は『頂きます』と言うのじゃよ」

『そうなのだな。分かった、忘れず言うとしよう』
「いただきます」という言葉を教えると、早速それを言つて食事を始める。

ふと竜の手でご飯を食べられるだろうかという心配が過つたが、その心配は他所に暗竜は刺身を一枚浮かし、口の中に入れる。

手が使えなくとも、彼にはそう言つた方法があるようだ。とりあえずはこれで良いだろうと、安心して自分も食事をする。

そして暗竜は口の中に刺身を入れると、咀嚼などはせずぐくりとそのまま飲み込む。

『この味は、魚だよな？』

「ああ。魚じゃよ」

『そ、そうなのか。この世界の魚は、このような形をしているのだな……』

興味深そうに言う暗竜。この言い草、おそらく彼の頭の中ではこの切り身が泳いでいるのだろう。

「暗竜、これは肉を切つたモノであつて、これがそのまま泳いでいる訳ではないぞ？」

教えると、暗竜は自分の勘違いに気が付く。彼が人の姿をしていれば、顔が赤くなつていただろう。

『だ、だよな！ 流石にこれが泳いでるわけないよな！』

「安心せい。近頃の幼子にはよくある勘違いじやからの」

前に聞いた事だ。最近の子どもは、魚の本体を見た事が無い為、よく見る切り身が泳いでいると勘違いしている事があると。だから何も驚くような間違いいではない。

しかし、暗竜は不服そうだ。

『余は子どもではないぞ』

「ほう、何歳なんじゃ？」

若干煽るように問われ、暗竜は答える。

『確か、百くらいだ』

「まだ子どもではないか。我など年齢などつつ

くに数えとらんわ」

事実、百辺りから数えるのを止めたのだ。

しかし、少なくとも皇暦である約二千七百よりは年上だ。初代天皇である神武天皇はアマテラスの子孫であり、これにより少なくとも彼より年上であると断言できる。

彼女の年齢が数えられない程だと知れば、暗竜も子ども扱いも致し方無しかと思ひ始める。とは言え、まだ若いとかならともかく子どもと同じにされるのは不服だと。

アマテラスは、そんな暗竜をい見て笑う。

「お主ももう直ぐ数えるのが億劫になる頃合いじゃ。現に、今もはつきりとした年数は覚えてなかるう？」

『確かに……!』

「そう言う事じゃ」

納得してくれた所で話を締めくくり、マグロを軽く醤油に付ける。付けすぎるとよくない、ほんのこのくらいで良い。このくらいが丁度いい塩加減になるのだ。

二十分ほどで食事を終え、食器の後片付けをする。

二人分の食器では洗う労力も倍だ。しかし、なんだか家族が増えたみたいに感じて、少しだけ嬉しかった。

後片付けを終え、後はお風呂に入り夜の時間をゆつくり過ごすだけだ。

「暗竜、風呂先入るか？」

『ふろ?』

訊くと、暗竜は何を問われたかを分からず、言葉を復唱しながら首を傾げる。

アマテラスにとって風呂は大事な物だ。まさか知らないのかと驚くが、忘れてはならない、彼は竜だ。生活様式も人とは違っだろうし、そもそも彼がどこからやって来たか分からない。その世界に風呂という概念がない可能性は十二分にある。

「体を洗って、あったかいお湯に浸かるんじゃ。一日の疲れを取るのに最適なんじゃよ」

説明をすると、暗竜の頭の中に思い浮かぶモノがあつたようだ。

『それは、水浴びのような物だろうか』

「まあ、用途は似たようなものじゃろうな。大体は温かいかなんかの違いじゃ」

そう言われると、暗竜は風呂に興味を持ったようだ。

『入りたい。それがどのようなモノか気になるぞ』

「そうかそうか、じゃあ」

先入って良いぞ。目を輝かせた暗竜に、そう言おうとしたアマテラスだがその脳裏にふと心配が浮かび上がった。

一人で入らせて、大丈夫だろうか。自分から見たら子どもだと言えど、彼も立派な成体の竜だ。滑って頭を打ったり溺れたりなんてはしないとは思うが。それでも、心配だ。

「一緒に入るか？」

『ああ！』

嬉しそうに返事をした暗竜。やはり彼の仕草はどことなく姉心に響く。

アマテラスは暗竜を連れて風呂に向かった。

「湯」という文字が書かれた暖簾をくぐると、そこはそこそこに広い脱衣所となっている。

とはいえ、竜はそもそも服を着ていないのだから。

「しかし、竜相手とは言え、異性の前で肌を晒すのは気恥ずかしいモノじゃのお……」

声からして、暗竜は雄だろう。姿形が違う事で多少は軽減されるが、それでも異性は異性だ。そんなアマテラスに、暗竜は首を傾げる。

『そうなのか。余はその、服という物を着ていないから分らないが』

「お主に分かりやすく言えば、後付けの鱗のような物じや。主も、鱗の下はあまり見られたくないであろう？」

『う、鱗の下か……それは確かに、そうだな』

暗竜はその例えにゾツとしたようだ。

どちらかと言えば鱗は皮膚になるのだろうか、多少大袈裟な表現だったのだろう。しかし、他にいい例えが見つからなかったのだ。

恥じらいは必然であるが、暗竜は竜であるため人体の雌の肉体に欲情などはないようだ。晒された肌色の体を見て、彼が思った事は一つ、この体、鱗がなくて脆そうだなと。

そんな事を思われている事は知らず、アマテラスは脱いだ服を竹籠に畳んで入れる。この籠に込められた神力により、風呂に入っている間に洗浄され、清潔を護っているのだ。

さて、早速風呂に入ってみる。外には綺麗な夜空と、わびさびを感じる整えられた庭が見えた。石に囲まれたお湯からは、もくもくと湯気が出ている。しかし、暗竜は湯気と言うのもを知らないように、揺らめくそれを不思議に思い、飛んでそこに頭を付いてみた。

湯気に実態はなく、壁にぶつかったような感覚はなかった。それで更に不思議に思った暗竜は、好奇心旺盛な子どものようにアマテラスに尋ねる。

『アマテラス、これは何だ？ 魔力などではないようだが』

「それは湯気じゃよ。そのお湯から出てくるのじゃ」

『ゆげ……そうか、ここから出ているのか』

暗竜は風呂の縁で水面を眺め、中に飛び込む。まるで水に飛び込むかのように。そんな風に飛び込んだせいで、彼は思いがけなかった熱さに飛び上がる。

『なんだこれは、見掛けは水のようになのに熱いぞ……』

「お湯じゃからのお。湯というのは、暖かくなつた水のことじゃ」

『そ、そうなのか。あの冷たいのが、暖くなる

事なんてあるのだな』

ちやぽんと尻尾をお湯に入れ、その温度を感じる。こうしてみれば、丁度よい暖かさだ。

やはり、念のため一緒に入って正解だったようだ。まさか、お湯に飛び込むとは。まあ、一先ず大丈夫であろう。

「我は先に体を洗うから、ゆっくり入っていてよいぞ」

『ああ、分かった』

暗竜はお湯に浸かり、ふうと息を吐く。お風呂は川と同じ感覚で飛び込むモノではないかと、今学んだ。

竜の体は丈夫とはいえ、暑さ寒さは勿論感じる。体が温まって、なんだかとても良い心地だ。

美味しいご飯をゆつくり食べられて、こうして感じる暖かさに気を休められる。

ああ、なんとも――

暗竜は空を見上げた。異星の空も大して変わらないのだと、そう感じた。

その日の夜、暗竜は寝室に敷かれた布団の上で丸くなって眠った。硬い床でないだけで、こうも変わるものかと驚いたものだ。

誰にも起こされることなく眠り、気がつけば障子の向こうが明るかった。

『朝……もう、そんな時間なのか……』

その声を漏らすと、部屋の椅子に座って本を読んでいたアマテラスは、暗竜が起きたことに

気が付きこちらを見た。

「おはよう。よく眠っていたようじゃな」

太陽が顔をだしたばかりのこの時間、なんだか彼女が輝いているかのように思えた。

『ああ、おはようアマテラス』

『久しぶりによく眠れたぞ。もう一眠りしたい気分だ』

「もう起きるのには十分な時間じゃよ。直ぐに朝ごはんを作るからの、部屋に行こうか」

『わかった』

すっと立ち上がり、アマテラスに付いて行く。

ご飯だと聞けば、なんだかお腹も空いてきたような気がした。